

乳がん 高度検診・治療センター NEW-す NO.49

2018.6

がん細胞の悪性度（組織学的グレード）とは？

手術や生検で得られた乳がんの組織や細胞を染色し、顕微鏡で観察する検査を病理検査といいます。乳がんの病理検査についてはセンターニュースNo.8（Ki-67について）、No.18（乳がんの病理検査）、No.43（病理検査医の活躍）でも紹介していますが、今回は「がん細胞の悪性度（組織学的グレード）」について取り上げたいと思います。

「がん細胞の悪性度」とは、顕微鏡で見たがん細胞の形から判断するもので、わかりやすいと「がん細胞の顔つきの悪さ」を評価したものです。

悪性度の分類のうち、世界で最も広く知られているのは「組織学的グレード」分類で、特別な染色を行う必要がなく通常の病理検査と同じ方法で評価を行うことが可能です。組織学的グレードは、再発のリスクを予測したり手術後の治療方針を決定したりする際に有用な因子の一つであり、古くから汎用されています。

■「がん細胞の悪性度（組織学的グレード）」の判定方法は？

がん細胞の並び方や、細胞の核の形が不ぞろいかどうか、細胞が盛んに増えているか、の3項目を点数化して評価し、これらの合計点数で3段階（グレード1-3）に分類します。グレード1が最も顔つきがおとなしいがん細胞（＝悪性度が低い）で、グレード3が最も顔つきが悪いがん細胞（＝悪性度が高い）ということです。



■「がん細胞の悪性度（組織学的グレード）」の結果は何に利用するの？

主に、術後の薬物治療の決定に利用します。特に、腋窩リンパ節に転移がないホルモン受容体陽性乳がんでは、再発の可能性を予測したり、術後の抗がん剤治療を追加するかどうかを検討するのに有用です。術後治療を決定するツールとして、最近では乳がんの遺伝子の増幅を調べるなど新しい技術も広がりつつありますが、いずれもまだ非常に高価であることが難点です。一方、「がん細胞の悪性度（組織学的グレード）」は安価かつ簡便な方法で評価することができるため、その有用性について近年改めて注目を浴びています。